

表情豊かなビリヤソン。写真撮影もいろいろなポーズで楽しませてくれた©中東生



# 支配人ビリヤソンが語る 「モーツァルト週間」

取材・文＝中東生  
Text＝Shinobu Nakai

モーツァルトの誕生日1月27日をはさんで10日間、楽聖の生地ザルツブルクで開催される「モーツァルト週間」が、1月24日から2月3日まで行われた。そのインテンダント（支配人）に、今年から国際的テノール歌手のローランド・ビリヤソンが就任したことが話題を呼んだ。

## 創設時の初心に戻る

### 就任早々

### 「モーツァルト・マラソン」

テノールとしてのみならず、演出家や小説家、イラストレーターとして、また

音楽だけでなく、バレエやパントマイム、人形劇、そして食も愛したモーツァルトのすべての面が見られるような企画を並べています

司会やテレビ番組出演等、世界中で引っ張りだこのローランド・ビリヤソンが、今年から「ザルツブルク・モーツァルト週間」のインテンダントを務める。1年目の今年から、このフェスティバル63年の歴史上、例を見ない「モーツァルト・マラソン」を決行。11日間に10会場で55公演を打ち、その中で37公演が満員御礼になるなど、観客の期待が膨らんだ。2

万8000枚のチケットを売り上げ、93パーセントの集客率を誇る大成功を収めた。その開催直前の1月15日、電話インタビューなどのスケジュールが詰まっている中、本誌読者に向けてモーツァルト、そしてパフォーマンスへの愛情を語ってもらった。

## モーツァルトは万華鏡

——超過密スケジュールの中、インテントを引受けようと思われた動機は何ですか。

「モーツァルトを愛しているからです！とは言っても、2017年夏にオファーをいただいて、最初は嬉しくて、でもそれから、2カ月間かけて熟考した末に決断しました。創設された1956年の初心に戻って、オール・モーツァルトのプログラムを組みたかったのですが、毎年登場となるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団やマラー・チェンバー・オーケストラ、アンドラーシユ・シフなどの超一流アーティストたちも色褪せないように、5つのポイントを決め、そこから広がっていく大まかな構成を呈示して、『これで良ければ引き受けます』とお返事したのです。僕にとつてのモーツァルトは万華鏡なので、音楽だけでなく、バレエやパントマイム、人形劇、そして食も愛した大作曲家のすべての面が見られるような企画を並べています」

——どうしたら、そんなに色々なことがこなせるのですか

「時間をうまくマネジメントすれば不可能ではありません。忙しい時でも、毎日朝晩30分の発声練習は欠かしません。で

も例えばベルリンでJ・シユトラウス2世《こうもり》を演出した時は、同時にドビュッシー《ペレアスとメリザンド》を勉強しなければならぬ時期だったので、朝1時間半の音楽稽古をして、11時から演出家に変身していました。演出をすると、夜はもう歌える声が残っていませんから。そして夜中は小説家になるのです！秘訣は、常に「いま」していることに100パーセント集中すること。こうしてあなたと話している時は100パーセントあなたに集中し、この後、練習を見に行く時には、そこに100パーセント集中する。

## 歌手にならなかつたら神父に

——メキシコで、朝は学校で子供たちを教え、昼は音楽院で学び、夜はパーティという生活をしていただけの役に立っていないですね(笑)

「いやあ、パーティーは危険です。仕事、学校の長椅子でよく居眠りしていた

ものですが、実は神父になりたいと思っていました」

——だから、人助けの精神にあふれているのでしょうか。東日本大震災直後も、メトロポリタン歌劇場来日公演のドニゼッティ《ランメルモールのルチア》にジヨゼフ・カレヤの代役として出演し、ギヤラをそのまま寄付したという話ですが。「ああ、あの件は誰にも言わないで頼んだのですが、ピーター・ゲルプ総裁が話してしまつて。困っている人を助けるのは、お礼を言われるためではなく、助けることができる人の義務だからです。

その上、私たちメキシコ人はメキシコ大地震の時に日本人に助けられているのですから、当然のことで、こちらがお礼を言いたいです」

——神父にならなかつたのは、家で歌っていたらスカウトされたからだとか。

「ええ。12歳のとき、近所を訪ねて来た人がエスパシオス・アカデミーの学長で、その学校に入学するよう勧めてくれたのです。そのころからブラシド・ドミンゴ

などを聴き始め、音楽全般が僕の思春期の『避難所』でした。でも、ダンスも履修できる学校だったので、パフォーマンス全般が好きでした。子供たちの誕生会にピエロとして登場する仕事も行っていましたが、その学校でのコンサートを聴いたバリトン歌手のアルトゥーロ・ニエトがオペラ歌手になるために、メキシコシティの国立音楽院に行くことを勧めてくれたのです」

## ドミンゴとの出会い

——そのドミンゴとも縁の繋がる出会いをしたのですよね。

「1993年だったか、僕たちの劇場にドミンゴが来ることを支配人が耳打ちしてくれたので、僕は当時珍しかった携帯電話で電話しているふりをして、楽屋付近でドミンゴを待ち、アポなし突撃をしたのです！翌年の再来時にも会いに行き、コンクールのオペラリアに出ることを勧められたのですが、まだまだ恐れ多く、暫く修行して、その次の回に出場し、それからは仕事がどんどん決まりました」

——どしゃ降りの雨の中、ブッチーニ《ボエーム》のロドルフォを歌ったフレゲンツ音楽祭が私の「ピリヤソン初体験」でしたが、ザルツブルク音楽祭のヴェルディ《椿姫》など、アンナ・ネトレブコとの共演は一世を風靡しました。

「ステージは僕にとつて『真面目なゲーム』です。子供が真剣に遊んでいるように、役になりきるゲームです。オペラ出演の他、次のCDの企画も決まりつつありますが、今はやっぱりモーツァルトへの愛が止まりません！」



「モーツァルト週間」記者会見でのピリヤソン  
©Wolfgang Lienbacher

## Rolando Villazon, Intendant speaks about “Mozart Festwochen”.